



書評

価格はすべて10%税込です

援助者必携

心理カウンセリングのための
精神病理学入門

内海 健, 津川律子著

金剛出版, 四六判 304 頁, 3,740 円, 2025 年 2 月刊

(東京国際大学) 妙木浩之

面白い対談, しかも便利な啓蒙書になっている。精神病理学の論客である内海健氏と臨床心理学の代表者である津川律子氏の対談である。古いワインを新しい瓶で, というかその逆なのか, きわめて新しい精神病理学体系を聞いているようで, 出てくる理論はとっても古い, ヤスパースや土居健郎といった古典だったり, 同時にルーマンやバロン・コーエンなど新しい論客の名前が出てきたりするところもあって, それらがクロスオーバーする感覚が興味深い。内海氏の博学のせいもあるかもしれないが, 津川氏の「はじめに」に, 精神病理学の定義から「精神病およびその周辺を病む人たち」「メンタルヘルスを害している可能性がある人たち」という言い換えして心理に引き付けているところが, この効果を生み出しているのかもしれない。その意味で, 貴重な交流の産物である。

内海健氏は, 精神病理学の世界で統合失調症, 気分障害, そして発達障害のオリジナルな著作を世に送り出してきた。最近では大佛次郎賞を受賞した『金閣を焼かなければならぬ—林養賢と三島由紀夫』で病跡学を超えた, 文学的な想像力の域を見せている。だから読者として彼の本はどれも面白いが, これまでの統合失調症から発達障害までの精神病理学的な著作のそれぞれを全体として, まとまった彼の精神病理学像を知りたいという思いは, この領域の多くの人が思ってきたことだろう。津川律子先生は, 臨床心理の世界でアセスメントの専門家として活躍してきた人だから, この仕事に適任だったといえるのかもしれない。内海氏の本をよく読みこんでいて,

その精神病理学を中心に聞く視点から広く心理臨床の人たちにもわかる言葉で, その全体を言い換えている。共通しているのは, 事例性を重視していること, 症状だけではない人を診断するという立場だろうが, お互いの交わりを重ねて, 内海氏は病理に, 津川氏はアセスメントに引き付けて論じている。実に息の合った対話になっている。

実際「日常臨床では, 心因性の傾向のある人も内因性の傾向のある人も, あらかじめ分類されることなく対人援助職の前に」現れる。この本が「援助者必携」とあるように, そこでの見分けるコツのようなものがわかれば, 受診から投薬, 心理療法やカウンセリングの連携はうまくいくだろう。また心理の人だけではなく気分障害, 統合失調症, そして発達障害の理解と臨床にとっての教科書として, この本を開く人もいだろう。あるいはカウンセリングをしていて, どんな事例を精神科医にリファーしたらいいのか, と困っている心理の人は多い。そんな素朴な問題から, そもそも狂気とは何か, という理屈を考えたい人まで, 広く読者が納得できるような本になっている。

さらに本書の後半には精神病理の専門家が心理士の人たちにどんなことを期待しているのかという心理士へのメッセージが三つ描かれている。なるほどと思う内容だったので, ぜひ本書を手にとってほしいと思う。

対談という形式は, しばしばお互いの論陣にそれぞれ自由連想が広がって, 拡散してしまうことが多いけれども, 本書は内海ハンドブックといっても良いようなまとまった内容になっている。お薦めしたい。